

# アマデウス通信

(制作・著作) 日本モーツァルト愛好会

2016. 05. 05 No. 42

## 目次

## 第436回例会だより

### 第436回例会だより

バレンボイムのP協 27番 K595 を聴く  
K.618 紺野 信寿

2016年新春例会  
＜モーツァルト,心に沁みるピアノ協奏曲＞  
を耳に残して  
K.413 岩島 富士江

入会のごあいさつ  
この会に辿り着くまで  
K.332 K. I

妄想劇／続「長屋のモーツァルト」  
(天国篇)  
K.425 朝吹 英和

ピアノ協奏曲 第15番 変口長調 K.450  
第3楽章 アレグロ  
K.294 藤田 真人

ケツヘル番号談義  
～ピアノ協奏曲シリーズ  
「ピアノ協奏曲第20番 K.466」  
K.466 中條 熙子

続「発表の楽しみ」  
K.377 草壁 孝也

読後感想  
「モーツァルト最後の四年」栄光への門出  
クリストフ・ヴォルフ 著 (磯山 雅 訳)  
K.317 本吉 英紀

モーツァルトの音の探求 (17)  
[33] 疾走するかなしさ  
K.488 ガーディナー・イズミ

2016年2月21日

会場:光が丘美術館

報告:ガーディナー・イズミ

### モーツァルトを愛好する 若手演奏家シリーズ No. 9

出演:ピアノ演奏 白川多紀さん

### プログラム

- 1) 幻想曲ニ短調 K.397
- 2) ピアノ・ソナタ第6番 K.284
- 3) ピアノ・ソナタ第4番 K.282
- 4) 前奏曲とフーガ ハ長調 K.394
- 5) ロンド イ短調 K.511

私は最初の幻想曲ニ短調を聴いて、一音一音丁寧に弾かれて、オーソドックスな演奏だと感じた。たまたま隣の席に紺野信寿さんがおられたので、その旨感想を言ったら、紺野さんの感想は少し違っていた。「風格のある演奏だ。フェルマータが効いていた。ショパンの演奏の影響がうかがえる。堂々と弾いているのがいい。」ということだった。

ピアノ・ソナタ第4番、6番はモーツァルトがマンハイム・パリ旅行でマンハイムに着く直前ミュンヘンで作曲したことは知っていたので、曲も覚えがあるつもりだったが、はじめて聴く曲のように馴染みがなく、逆に新鮮だった。私はマンハイム以降ケツヘル300番台のピアノ・ソナタが好みだから、ミュ

ンヘンとマンハイムの間で作風が急激に変わったのではないかと思った。

演奏が終わったとき紺野さんは「この人は、磨けば大物になるよ。」と言われた。この期待の言葉がかない、再演の日が訪れることを念じている。



## 入会のごあいさつ



### この会に辿り着くまで

#### K.332 K. I

2月に入会しました。クラシック音楽やモーツァルトにはど素人なので、ここに書いて皆さまに役立つような知識は何一つ持ち合わせていません。皆さまがどのような音楽遍歴をお持ちの方なのか存じ上げませんが、とても興味深いです。だから逆に、自分が知りたいことをまずは自分が書くことにします。

小さい頃は音楽より図工や理科に興味がありました。親から買ってもらった宇宙に関する本がお気に入りでした。3月の例会で話が出たウィリアム・ハーシェルが作った大望遠鏡の図も載っていました。小学校の頃、母親にヤマハ音楽教室でピアノを習わされました

が、日頃クラシック音楽を聞いていたわけでもないのにピアノにも興味はなく、早々にやめてしまいました。

中学に入り、ロックに出会いました。ピンク・フロイドの「原子心母」は、チェロの音色が美しい、当時としては先進的なロックで、ショックを受けました。高校に入り、アマチュア・バンドを作り、電子オルガンを担当し、曲も作りました。しかし音楽的才能がゼロなのでバンドはやめ、油絵を始めました。また、百花繚乱の時代を迎えたロックも、1970年代半ばから80年代に入ると商業的になりマンネリ化して、魅力を感じなくなってしまいました。

会社に入ってから聞いてショックを受けたレコードは、メータがロサンゼルス・フィルを指揮した「春の祭典」です。ラスコー洞窟の壁画のジャケットのLPでした。友達もこの曲が大好きで、深夜彼の家でレコードに合わせてみんなで春の祭典を歌い、打楽器の代わりにプラスチックのゴミ箱をたたき、ゴミ箱が割れて血を流し、近所からも苦情が来ました。

結婚して少しした頃、たまたまお茶の水のディスクユニオンでホグウッドの「ブランデンブルク協奏曲」が流れていて、今まで聞いていた演奏とは違う、楽しく生き生きとした音楽に驚きました。これが古楽器による演奏との出会いでした。

その後、内田光子の「ピアノ・ソナタ第11番 イ長調 トルコ行進曲つき」のCDと出会い、モーツァルトが好きになりました。一緒に入っていた第12番に「こんないい曲もあるんだ」と思い、これが今の私のモーツァルト愛好会におけるケッヘル番号になりました。

時もだいぶ経ち、定年近くになると時間も出来てきたので、クラシックを一から聞いてみようと思い、名曲名盤の本で推薦されているものを中心に、興味がある曲を順次買い集めていきました。モーツァルトはグルダとアー

ノンクルのピアノ協奏曲やバレンボイムのピアノ協奏曲全集（最初のもの）などを買いました。この頃から一番好きな作曲家はモーツァルトになりました。

会社をやめてから、油絵を再開しました。今は、自由時間の大半を絵の検討や制作に費やし、畳 2/3 ほどの大きさの作品を制作しています。光が丘美術館のホームページを見てこの愛好会を知り、2月の例会におじゃまして、その場で入会しました。

4月になり、我が家にはモーツァルトをフォルテピアノで演奏したCDは1枚もなかったこともあり、例会の予習に小倉貴久さんのCD「ファンタジー」を買いました。「K.475 幻想曲 ハ短調」「K.457 ピアノ・ソナタ第14番 ハ短調」の演奏のあまりのすごさに度胆を抜かれました。幻想曲では、人生の辛かったこと、楽しかったことが走馬灯のように駆け巡るような気がしました。ピアノ・ソナタの第2楽章は、心に平安が訪れたように思いました。例会では小倉さんの演奏を聴き、サインもいただき、お話することもでき、感激です。

この会に入ってまだ2ヶ月ですが、音楽に触れる幅と深さが何倍も広がりました。自分一人でCDを聞いているだけでは決して出来なかったことです。これも長年会を運営されてきた皆さまの大変なご努力のおかげと感謝しております。何一つ分からぬ私ですが、どうぞよろしく願いいたします。



## 妄想劇／続「長屋のモーツァルト」 (天国篇)

K.425 朝吹 英和

相変わらず時制を超越した支離滅裂妄想劇の続編でございます。ご用とお急ぎでない方はご笑覧の程お願い致します。

時：定かではない

所：天国3丁目

熊さん（以下熊）：よう、八つつあん、久しぶりに天国横丁のご隠居さんのご機嫌伺いに行こうじゃねえか

八つつあん（以下八）：下界にいる時におせえて貰ったモーツァルト（以下M）さんの話の続きなんぞ聞いてみてえな

熊：おう、「ドン・ジョヴァンニ」とか言う芝居だったな。あれから何度もDVDとやらを見たんだがどうも分からねえ事が多過ぎるんで今日はスッキリしてえな

熊・八：ちわ～、ご隠居さんいるかあ！

隠居（以下：隠）：オヤオヤ、お揃いで久しぶりだね。熊さんも最近こっちに来なすつたと聞いていたが、暮らしはどうかね

熊：いやあ、結構なもんです。天国良いとこ酒は美味しいし、ねえちゃんは綺麗だ♪

八：どっかで聞いた台詞だな（笑）

隠：そうさな、下界で功德を積んだ者だけがこちらに来る事が出来るのでな。神様の思し召しと言うものじゃよ

八：するってえと、ドンの野郎は天国には居ないって訳ですな

隠：左様、地獄に落ちたまま一向に改心しないのでな

熊：ご隠居さんにおせえて貰ったドンの話ですがね、どうにも良く分からねえんでね

隠：そうさな、私も江戸の横丁におる頃には辻褄が合わない話じゃと一刀斎先生にも

お尋ね申した事があってな  
八：分からねえ順にお尋ねしますがね。騎士長の娘のアンナさんの寢室に夜這いにへえったドン野郎が騎士長を殺してからすぐに愚図野郎のオッタビオが同じ屋根の下から出て来るってのは可笑しくねえですかね  
熊：あっしも、そこんところが分からねえんで  
八：愚図野郎が屋敷でアンナさんと会ってから別の部屋に泊っていたって訳ですかね  
熊：騒がしいのでノコノコ出て来たって訳か  
隠：歌劇の筋書きはいい加減なものでな、時間やら場所は無視して荒唐無稽な話も多いそうじゃが、歌や芝居をそのまま楽しめば良いと言うものらしいのでな  
八：もう一つ腑に落ちねえのは、アンナさんとドンは知り合いだっていうじゃねえですか。知り合い同士の男と女が揉み合っても誰だか気が付かねえもんですかね  
熊：そうよ、こちら幼馴染みのお七姐さんと揉み合ったらお面付けててもすぐに匂いで分かるがね  
隠：そこじゃよ、一刀斎先生によるとアンナさんは忍び込んで来た男がドンとすぐに分かって、ドンに身を預けてしまったという話でな  
熊：するってえと、アンナさんもレポレロのカタログにお名前が載っているって訳ですかね  
八：太てえ奴だな、ドンの野郎は  
隠：いやいや、そこは武士の、いやいや貴族の情けでな、レポレロには首尾を遂げなかったと言うてな  
八：でも、ご隠居さん、アンナさんはドンと纏れながら階段を下りてきやしたが  
隠：そこじゃよ。一刀斎先生によれば、ドンに身を任せてしまったアンナさんは許婚の手前、良心の呵責に耐えかねて、ドンを不審者扱いして騒動を起こして幕引きを図ったそうな  
熊：随分とややこしい話だな、こいつあ  
隠：いやいや、熊さんよ、もっとややこしい説もあるそうでな  
八：何だか面白れえ事になって来たね  
隠：実はアンナさんはオッタビオと知り合う前にドンと男女の仲になっておってな  
熊：するってえと、ドンが忘れられなくなったアンナさんがドンに合鍵でも渡して、こっそり引き入れたって事ですかね  
隠：熊さんも察しが早いね  
八：そうなるってえと、アンナさんも下司の極みの乙女、いや娘で相当な性悪女だな  
熊：厳つい騎士長の娘だからさぞや身持ちが堅てえかと思いやしたがね・・・  
八：人は見かけによらねえもんだな・・・  
隠：所でな、この歌劇のウィーンでの初演の時にアンナを歌ったのが M さんの初恋の人で、結局は振られてしまったアロイジアという美貌の歌手のお方でな  
八：そうすると、性悪女のアンナさんをアロイジアさんに割り振ったってえ訳か。恋の面当てかいな  
隠：まあまあ、洋の東西を問わず男女の仲は複雑怪奇なものでな。M さんは俳優と結婚なされたアロイジアさんと又会ったり、アロイジアさんのために沢山作曲までしたそうな  
熊：昔の恋人が忘れられなかったって、あっしにも良く分かるね、その気持ちが  
隠：三流の瓦版のようになって何だが、再会した M さんとアロイジアさんは不倫の仲になって M 夫人のコンスタンツェさんが嫉妬したと言う話もあってな。夫人の姉がアロイジアさんだけにややこしい話じゃよ  
八：本当にややこしくて訳の分からねえ話になって来たね、こりゃあ  
隠：まあ、証拠のある話ではないので、この位にしておくがな、M さんの葬儀にアロイジアさんは参列したのに、奥方のコン

スタンツェさんは参列しなかった事も噂話に火を付けたそうじゃよ。話が脱線してもうたが、Mさんも相当に女性には目がなかったお方だそうでな

熊：「ドン・ジョヴァンニ」の芝居や音楽が気持ちいいのも道理だね

隠：何でも、Mさんは「無駄口を叩いた女性と結婚せねばならぬとすれば妻は200人にもなる」と言うたそうでな

八：まあ、石部金吉みてえなルートヴィッヒの旦那さんとは大違げえだね。こないだも難しい顔して歩いていなさったな

隠：音楽で男女の機微の表現にかけてはMさんの右に出るお方はいないそうでな。小説では紫式部さんが天国でも一番という話でな

熊：八つつあんとは違ってあっしにはエルヴィラさんの気持が今一つ良く分からねえんですがね・・・

八：何でもドンと一緒に三日目に振られたお方なのに、ドンと再会してからも一途にドンの後をついて回ってますがね

熊：最後に亡霊がお出ましの時にもドンの館まで来て、ドンに改心を迫っているところなんざ意地らしくて涙がちょちょ切れちまうね

隠：左様、Mさんもエルヴィラさんに同情的でな、素晴らしい音楽を付けているそうでな

熊：そこへ行くってえと、村娘のツェルリーナは相当な玉ですぜ

八：結婚式の日ドンに誘惑されて亭主をほったらかしにしたかと思えば、ドンの館でもまたドンの甘い言葉に乗って一緒に部屋まで付いて行っちゃまうなんざ

熊：そうだな、いやなら抵抗すれば回りに沢山人がいたのにな・・・

隠：左様、西洋ではコケットリーと言うてな女が見せる艶めかしい仕草が人一倍強かった方のような

熊：コケッココーって鶏みてえな女の事ですかね

八：そういや、ドンに誘惑されると何時も嬉しそうに首や腰を振って付いていったな

隠：動物の雄は子孫を沢山残そうとして雌に対して能動的になるのでな、差し詰めドンは雄の権化じゃな。反対に雌は優れた子孫を残すために本能的に優秀な雄、強い雄を求める訳じゃよ。つまりは強い雄に雌の魅力を振りまく訳じゃ

熊：それがコケット何とかがってえ訳ですかね

八：女の事になると熊公も呑み込みが早えな

隠：そうさな、アンナさんもドンに比べたら優柔不断で愚図なオッタビオには男の魅力が欠けておると、見切りを付けてしまったのかも知れないね

熊：ご隠居さん、もう一つ分からねえ事があるんですがね。最後に亡霊がやって来てドンに「悔い改めよ」と迫っていますがね、確かに稀代の女たらしのドンですが、懇ろになった女も皆さん納得ずくじゃあなかったんですかね。何も地獄に落とさなくとも思いましたがね

八：そういや尻軽のツェルリーナさんも情深いエルヴィラさんもドンに擦り寄っていたし、一刀斎先生の話じゃあアンナさんだって・・・尤もアンナさんの親爺を殺しちゃったのがいけなかったんですかね

隠：私も最初は人殺しの罪が重かったと思っておったが、一刀斎先生によると、決闘を申し込んだのは騎士長の方でな、申し込まれたドンは一度は断っておるが、名門貴族の名誉にかけて闘う事を引き受けた訳で、西洋の掟ではドンに責任はないそうな

熊：それじゃあ、地獄行きのドンが余計可哀そうだな

隠：耶蘇教では「情欲をもって女を見る」事は姦淫と言うて「地獄に落ちる罪」じゃと聞いておるがな

熊：うんじゃあ、あっしなんざドン仲間入りで今頃は地獄暮らしだな、くわばらくわばら・・・

隠：まあ、下界における時は耶蘇の事は話題にただけでもお上に目を付けられたものじゃが。所で、芝居の話はこの位にして、一番気に入った音楽について聞かせてもらおうかね

八：あっしは一途なエルヴィラさんの心情が出た歌に痺れるね。

熊：こちらら男気とヤル気満々のドンの野郎がいいね。オッタビオやらマゼットやら腑抜け野郎の歌は面白くねえや

隠：熊さんはそう言うがな、Mさんの凄い所は腑抜け男には腑抜けに相応しい音楽をちゃんと作ってなさるのじゃよ

熊：そりゃあ、確かだね

八：ご隠居さん、結局の所、この芝居でMさんは何が言いたかったのかね

隠：「色即是空 空即是色」と言うてな・・・

熊：「四季即食うぜ」ってえと春夏秋冬、年中美味いもん食って女漁りをしているって事ですかい

隠：いやいや、そうではなくてな、お釈迦様の言葉なのじゃよ。「色」とは目に見えるもの全てと言う意味でな、「空」とは空っぽ、つまり何も無い事なのじゃ

熊：目に見えるものが空っぽたあ合点がいかねえ話だな

隠：見えているものの背後には必ず本質があるのじゃが、本質は見えない。その見えない本質の事を「空」というて、万物を形づくるエネルギーとでも言おうかね。エネルギーとは仕事をなす能力、活力の事じゃよ

八：何だか難しい話だね

隠：例えば、私や皆さんがたも「色」の一つとして存在しておるが、今日の私は昨日とは違っておるし、明日もまた少しは違

うだろう。つまり変化しておる訳でな、よく極楽寺の和尚さんが「世の中無常」と言うてなさるが、「常に変わらぬものはなく、全ては変化して行く」と言う世の中の道理の事じゃよ

熊：どんどん変わって行くものだから、つまり「色」は「空」って事ですかね

八：ぼんやり分かったような気もしますがね それと「ドン・ジョヴァンニ」の話は何処で繋がるんですかね

隠：一刀斎先生によるとな、ドンは何時も新出逢いを求めて雄のエネルギーを全開しておった男なので、創作意欲が溢れておったMさんは特別に張り切って作曲したそうな

熊：そういや、下界でおせえて貰ったキルケゴールとかいう学者先生のご託宣も確かそんな話でしたね

隠：熊さんも良く覚えておいでだな。ドンに誘惑された女は皆さん燃え上って浄められる訳でな、つまりはドンドンと変化して行くエネルギーをドンに注入された訳じゃよ

熊：ドンにドンドンとは、ご隠居さんの駄洒落が出たね

八：あっしは色男の女漁りの話かと思っていやしたが、案外深げえ話なんだね。亡霊が何度も改心を迫っても、剛直に自分の生き方を変えなかったドンの潔さが身に沁みたね

隠：一刀斎先生に聞いた話じゃが、河上の徹爺というお方の説によると、「この歌劇は人間にとって避けられない死を背景とした生命力の頭れ」という事だな

熊：そうや、ドンの人殺しに始まって、最後にや亡霊に復讐されてドンも殺されちゃうって話だわな

隠：「生と死」、「明と暗」、「表と裏」、「喜びと悲しみ」など人生は両極端なものが交錯しておるが、Mさんはそうした人間

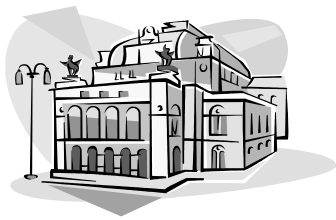
の生き方や感情を音楽で表現した天才じやと一刀齋先生も言うておられたな

八：今日はいい話を聞かせてもらったな。熊さんや、また「ドン・ジョヴァンニ」のDVDを聴いてみてえな

隠：善きにつけ悪しきにつけ、信念を貫いて生きる事は肝要な事だな、ドンは「空」の存在を身をもって証明したとも言えそうだな。この芝居をどう解釈するか、どんな思いを込めて歌ったり演奏したりするかで色々な世界が表現されるのな。奥の深い傑作じやによって今でも下界では人気があるのじやよ

熊：そういや、来月の天国劇場でも「ドン・ジョヴァンニ」をやるそうだね。指揮は勿論モーツァルトさんで、アロイジアさんとコンスタンツェさんが出演するし、面白そうだから見に行きやしょうか

隠：そりゃあ、結構な話じや。一刀齋先生もお誘いして参ろうとするか（完）



## My Favorite Mozart

### ピアノ協奏曲 第15番 変ロ長調 K.450 第3楽章 アレグロ

K.294 藤田 真人

ピアノコンチェルト15番の第3楽章が好きです。

変ロ長調という調性と出だしの少女が野原をスキップするようなメロディーを聴いていると、K.595の第3楽章が思い浮かびます・・・

映画「アマデウス」でも使われていましたが、非常に優雅で、シャンデリアが輝く美しいホールで演奏されているモーツァルトの様子が、なんとなく思い浮かびます。

冒頭部のスキップを踏むようなリズムを聴いているだけで気持ちが明るくなってきます・・・

弦とピアノとの掛け合いが本当に美しいですね。未来永劫この美しい弦との掛け合いが続くのではないかと思っているところに、やはり、いつものオーボエなどのやさしく美しい木管との掛け合いも始まります・・・

終盤のピアノだけで演奏される部分にはモーツァルトらしい展開に絶句してしまうくらいのおもしろさを感じます。

モーツァルト中期の絶頂期の様子がとてもわかる曲です・・・

ちなみに聴いているCDの録音場所のキングスウェイ・ホールとレコーディング・エンジニアがジョン・ドンケリーの組み合わせの録音が特にアシュケナーズのCDの演奏の中で特に気に入っています。

聴いているCD:

ガラデー・ミル・アシュケナーズ(ピアノ・指揮)

フィルハーモニア管弦楽団

ロンドン POCL-2410

デジタルレコーディング



「モーツァルト最後の四年」 栄光への門出  
クリストフ・ヴォルフ 著 (磯山 雅 訳)

### K.317 本吉 英紀

宮田さんのご紹介で、この本を読みました。著者は、1788年からモーツァルトの亡くなる1791年12月までの4年間の作品については、これまで、現世への惜別の辞を読み取ろうとする考えが主流となって来たが、このような、モーツァルトに迫りくる死を強調する従来の考え方を見直したい。そして、この期間の作品をよく分析すると、それらの作品は、モーツァルトの避けがたい終焉に向かう音楽というよりは、むしろ新しい始まりを意味する作品ととらえることが出来ると指摘しています。著者の言う新しい始まりの根拠は以下の点に述べられています。

- 1、1787年末にウィーン宮廷から、希望していた宮廷作曲家の地位を与えられたこと。この任命により、モーツァルトの名声ウィーンとハプスブルク帝国を越えておおいに高まったこと。
- 2、宮廷との契約は、ウィーンに住むという義務を伴うものではなかった。この立場を活用してモーツァルトは外の世界の探索を始めた。皇帝に仕えるようになった今こそ、グルックのように、ウィーンの外に活動の場を広げ、存在感を示したいと思ったこと(ライプチヒ、ベルリン、フランクフルトへの旅)。
- 3、ターニングポイントとして、過去の音楽経験と、新しい諸方法の慎重にして大胆な実験との間にバランスを見出していく円熟した手堅さがみられること。この期間に作曲された作品に対して、「帝室

期」または「帝室様式」という呼称が指標になること。

- 4、「魔笛」の成功。1800年までにウィーンのアウフ・デア・ヴィーデン劇場だけで200回以上上演され、音楽劇の新しい造形を模索する作品となったこと。
- 5、「レクイエム」と「アヴェ・ヴェルム・コルプス」は互いに補いあいながら、モーツァルトの教会音楽の頂点ともいえる作品であり、また、宗教音楽の新しい様式に対する探索の結実でもあり、新たな出発を示すものに他ならないこと。
- 6、完成されなかった断章は、モーツァルトの創造的な作品の別動隊であり、「自作品目録」の作品と補い合わせて考えるべきであること。それらの断章は完成された多数の作品と同様に、作曲技法の観点からすれば、いっそう具体的にモーツァルトが「未来の門出」とみなしたものを垣間見せてくれること。

あのハイドンでさえ、獲得できなかった宮廷作曲家の地位を得たモーツァルト。800フローリンの年俸はさておき、宮廷に評価されたという喜びは大きかったと推測される。正当に認められることなく、貧困のうちに若くして亡くなったモーツァルト。そのような「かわいそうな」イメージを払拭し、彼の最後の4年間をまったく異なった観点から描いたのが本書であり、モーツァルトを愛する我々に新しい希望を与えてくれます。

：：： \* \* \* : : :

以下省略致します。

会に入会してご購入頂ければ幸いです。